学位論文要旨

体育授業研究における教師教育者の「学び」に関する基礎的研究

― 中国人留学生によるセルフスタディを通して ―

広島大学大学院教育学研究科
教育学習科学専攻　教科教育学分野
健康スポーツ教育学領域

D191100　敖敦其其格

1. 研究の背景及び問題の所在

教師教育の質を保証する条件の 1 つとして，教師教育者の存在が注目されている．しかし，教師教育者の定義は，国とその背景ごとに様々であり，教師教育者になるまで，多様な経歴を持ち，その職務も多様である（Lunenberg，2010）．そして，1980 年代では教師教育者について，ほとんど研究されていなかった（Lanier and Little，1986）が，1990 年代後半からようやく教師教育者に関心が向けられ，教師教育者に関する研究も次第に増えてきた（Koster et al.，2005）．Cochran-Smith（2003）は，教師教育者としての役割を担うために，教師教育者による専門的学習（professional learning）が不可欠であることを指摘している．

ところで，Kosnik et al.（2015）は，教師教育者の専門的学習は体系的に行われておらず，その多くは実践の場で「やりながら学ぶ」（p.71）ことによって行われていることに言及している．また，ルーネンベルクほか（2017）は，教師教育者の「学びが体系的な形で構成されていることはほとんどなく，学習の質は現場における学習機会によって左右される」（p.53）と指摘している．したがって，学習の質は教育現場，つまり教育制度や学校文化の違いによっても大きく異なり，その学習の機会も教師教育システムにより差異があるであろう．そして，教師教育者の学びが体系的に構成されにくい（ルーネンベルクほか，2017）のであれば，その国，独自の場における専門的学習が必要である．しかしながら，アジア圏においては，教師教育者に関する学術的研究は未だ少ない（小柳，2018 ; 鄭，2013）．しかも，アジア圏の教師教育者が，固有の専門的学習をどのように成しているのかといった研究も少ない．さらに，黄（2017）によると，中国の教師教育は発展途上であり，さらなる進展が必要であるといわれている．

そこで，中国の教師教育の背景や職務に共通点が多い日本の教師教育に目を向けてみる．日本には，教育の高い水準を担保し，教職の専門性を高度化する校内研修・教師教育のあり方として，世界的な注目を集めている授業研究がある．さらに，国際協力の分野においても授業研究の普及と研究推進に向けた取り組みが 1 つのムーブメントとなっている（Huang and Shimizu，2016）．齊藤（2020）は，「他国にレッスン・スタディを紹介・導入していく際，体育の授業は，言語的障壁が比較的小さい」（p.66）ことを挙げている．また，木原ほか（2018）は，体育授業研究では子どもの学習のつまずきに対して運動の出来具合が観察しやすく，「すべての教師がなぜできないのか，なぜわからないのか」（p.61）という問いを共有しやすいという．したがって，体育授業研究の参加者らは，研究授業の実施の段階で子どものつまずきを観察しやすく，授業後の協議会では授業者や他の参加者らと気づいたつまずきを共有することができる．つまり，体育授業研究は，授業者だけでなく，授業研究会の全ての参加者の成長に寄与しうることが期待される．そこで，本論文では体育授業研究に着目することとした．

他方，授業研究に関わる教師教育者とは，授業研究に長年関与してきた専門性を有する者や地域のリーダー的な存在の教師（鈴木，2016），教育行政機関における指導主事や外部講師あるいは指導助

言者として頼みを受けた大学教員（岩田，2020）などである．授業研究において教師教育者には，リーダーシップとしてのコーディネーションの力（木原，2006），そして何よりファシリテーターとして参加者が信頼できる環境を作ることが必要であるとされる（Sato et al.，2020）．しかしながら，教師教育者が授業研究の中で，どのように専門的学習をしていくのかといった研究は皆無に等しい．したがって，日本のみならず，中国における教師教育発展の一助のためにも，体育授業研究を通した教師教育者の「学び」について検討することは有意義であると考えられる．

2. 研究の目的

そこで本論文の目的は，中国から日本へ来た教師教育者を目指す留学生（以下，留学生 A と略記）を対象に，体育授業研究を通した教師教育者としての「学び」の実態を明らかにすることである．本論文の目的を達成するために，以下の 3 点を研究課題として設定した．

研究課題（1）日本の体育授業研究の観察による留学生 A の教師教育者としての「学び」の実態を明らかにする．

研究課題（2）日本の体育授業研究において，指導助言者として参画することによる留学生 A の教師教育者としての「学び」の実態を明らかにする．

研究課題（3）中国の教員養成校における体育授業研究の企画・運営による留学生 A の教師教育者としての「学び」の実態を明らかにする．

なお，本論文における「学び」とは，留学生 A の体育授業研究における，モノ（対象世界）との出会いと対話による活動，自己との出会いと対話による反省，他者との出会いと対話による協同の積み重なった過程（佐藤，1995）として捉える．そして，その前提として，留学生 A 自身が認知した様々な刺激の中から特徴的なものに焦点を当て，それを個人的な経験として言葉を使って表現する気づき（Schmidt，1990）も含めるものとする．

3. 研究方法論

研究の目的を達成するために，「セルフスタディ」（LaBoskey，2004）を援用する．セルフスタディは，教師教育者が意図的に当事者自身の教育活動を振り返り（Clarke and Erickson，2004），自分及び自分の関わる集団（協同する仲間や組織も含む）を対象とすることに特徴を有する．それによって，教師教育実践の理論化を促進し，教師教育者の専門性開発を進めていく方法論である（ロックラン，2019）．

一方，セルフスタディは，必ずクリティカルフレンドとの協同で行われる（Saramas，2010）．クリティカルフレンドとは，実践者が自身の実践を振り返る際に，枠組みを再構築することを助ける仲間のことであり，互いの信頼関係をベースとしつつ，時には厳しいフィードバックをし，ともに実践を振り返りながら実践者が経験から学び，専門性を高めることを助けるとされている（Russell and

Schuck，2005）.

そこで本論文では，セルフスタディを用いて留学生 A の教師教育者としての「学び」の実態を明らかにする.

4. 本論文の理論的枠組み

レイブ・ウェンガー（1993）は,「学習を実践共同体への参加の度合いの増加と見ること」（p.25）とし，特定の社会的実践を展開している共同体に参加することで学習が起こり，その学習は参加者個人のみではなく，実践共同体にも生起していると捉えている．このような「実践共同体（Community of Practice）」に参加することを通して学ばれる知識・技能の習得とアイデンティティの形成を「状況的学習（situated learning）」と呼んだ．また，レイブ・ウェンガー（1993）は，参加者が限定的で与えられた部分的課題を進行できる段階を「周辺的参加（peripheral participation）」とし，実践のために計画・実行などができるようになる段階を「十全的参加（full participation）」とした．そして,「周辺的参加」から「十全的参加」へと移行する条件として,「広範囲の進行中の活動，古参者たち，さらに共同体の他の成員にアクセスできなければならない．さらに，情報，資源，参加の機会へのアクセスも必要である」（pp.83-84）と述べている．すなわち，周辺的参加において，新参者から古参者へと移行していき状況的学習を経ることによって十全的参加をしていくのである. このように「周辺的参加」が「十全的参加」へと移行するプロセスを，レイブ・ウェンガー（1993）は，正統的周辺参加として理論化した.

そこで，本論文では，正統的周辺参加論を援用し，留学生 A の体育授業研究の観察，参画，企画・運営を通した教師教育者としての「学び」の実態を検討する.

5. 本論文の構成と方法

本論文の構成は，図 1 に示す通りである．本論文では，留学生 A を事例に，体育授業研究を通した教師教育者としての「学び」の実態について，質的調査法を用いて明らかにする．具体的には，以下の通りである.

第 1 章に続く第 2 章では，体育授業研究の観察による留学生 A の教師教育者としての「学び」の実態を明らかにする. 第 3 章では，体育授業研究において指導助言者として参画することによる留学生 A の教師教育者としての「学び」の実態を明らかにする．第 4 章では，体育授業研究の企画・運営による留学生 A の教師教育者としての「学び」の実態を明らかにする．最後に，第 5 章の本論文の成果と今後の課題では，第 1 章から第 4 章を踏まえ，留学生 A の体育授業研究の観察，参画，企画・運営を通した教師教育者としての「学び」の実態を明らかにする．なお，これらの成果から，本論文の限界と今後の課題についても整理する.

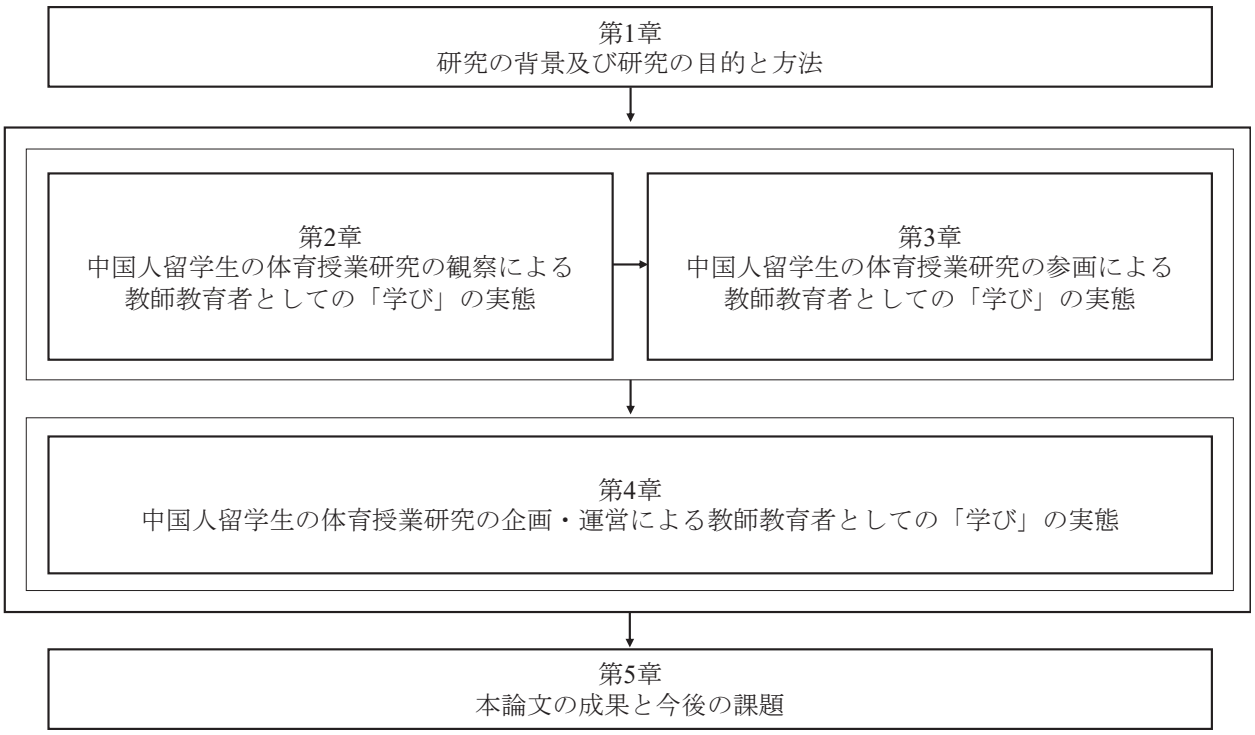

図１　本論文の構成

6. 結果

6.1. 中国人留学生の体育授業研究の観察による教師教育者としての「学び」の実態

第 2 章では，小学校 A，中学校 B，小学校 C において，体育授業研究の実態の観察や視察を行った留学生 A を対象とした．調査内容として，(1) 留学生 A が体育授業研究の観察や視察の際にとったフィールドノート，(2) 留学生 A が体育授業研究の観察後に書いた日記，(3) (1) 及び (2) の記録をもとに，視察後に行った振り返りとしてのグループインタビューを実施した．調査で得られたテクストデータについて，大谷（2019）で提案されている SCAT を用いて分析を行った．表 1 は，対象校の概要とその特徴を示している．

表１　対象校の概要とその特徴

日時	校種	特徴	留学生 A が参加した授業研究の内容
2018 年 10 月 19 日	小学校 A	体育や保健の授業改善に力点を置く学校であり，体育や保健の授業研究の研究指定校になるように申請中	学校施設や教育方針，授業研究の実施状況などに関する校長室での協議への参加
	中学校 B	体力向上推進校	体育授業（マット運動）の観察，研究授業後の協議会への参加，校内研修の打ち合わせへの参加

	小学校 C	体力向上推進校	ボール運動（フラッグフットボール）の観察，全体講演会の視聴
2018 年 11 月 2 日	中学校 B	体力向上推進校	校内研修の一環としてのマット運動の観察，ワークショップ型の事後協議会への参加

結果として，以下の 2 点が明らかとなった．第 1 に，留学生 A の日本の体育授業研究のシステムや体育授業作りの仕組みの「学び」についてである．まず，日本の体育授業研究のシステムについて，留学生 A は，授業研究を①授業の準備，②研究授業の実施，③授業後の協議会といった 3 つの段階として捉えることの重要性に気づいた．そして，②研究授業の実施，③授業後の協議会，①授業の準備という順に気づきや「学び」を深めていた．事前準備の段階において，留学生 A は，教師教育者として教師や学習者とのラポールを形成し，協同的なコミュニティを構築することの重要性と教師教育者の「仲介者」としての苦労を学んだ．研究授業の実施の段階において，留学生 A は，日本の体育授業作りの仕組み，体育授業の目標設定や教師行動に気づき，中国の体育授業と比較する中で体育科の本質を捉え直す契機となった．授業後の協議会の段階において，留学生 A は，具体的な協議会の方略や教師のリフレクションの変化を目の当たりにすることで，授業研究における協議会の重要性について学ぶことができた．また，教師たちの協同的省察を促す，指導助言者の役割と指導助言者ごとの授業研究スタイルの違いを学んだ．

第 2 に，日本の授業研究を支える学校文化の「学び」についてである．具体的には，留学生 A が，日本の学校や授業を視察する際に，日本との比較を通しながら，お互いの国の教育や授業の特徴に気づき，自国である中国・内モンゴルの教育や体育授業に対する理解を深めることができた．それによって，自他国の学校文化の相違を認める寛容性について学んでいた．また，留学生 A は，学校視察や校長との直接の対話を通して，日本の体育授業研究だけではなく，それを支える学校文化についても「学び」とっていた．

6.2. 中国人留学生の体育授業研究の参画による教師教育者としての「学び」の実態

第 3 章では，X 県の Y 小学校で実施された体育授業研究に参画した留学生 A を対象とした．留学生 A の体育授業研究に参画したプロセスは，表 2 の通りである．また，体育授業研究の実施前のグループインタビュー（インタビュー1）と実施後のグループインタビュー（インタビュー2）で，得られたテクストデータについて，KJ 法（川喜田，1995）の分類手法を援用して帰納的に分析した．

表 2　体育授業研究の概要

内容	事前のミーティング	授業の準備	研究授業の実施	授業後の協議会
期日	2019 年 7 月 22 日	2019 年 9 月 19 日	2019 年 9 月 20 日	2019 年 9 月 20 日
目的	事前の打ち合わせ・授業者の課題の理解	指導案の作成と修正	授業観察	授業の改善
参加者	留学生 A/クリティカルフレンド Z 氏と K 氏/授業者	留学生 A/クリティカルフレンド Z 氏と K 氏/授業者	留学生 A/クリティカルフレンド Z 氏と K 氏/授業者/学校の教員/他の大学院生	留学生 A/クリティカルフレンド Z 氏と K 氏/授業者/学校の教員/他の大学院生
所用時間	1 時間	45 分	45 分	1 時間 20 分
場所	H 大学	Y 小学校	Y 小学校	Y 小学校

結果として，以下の 3 点が明らかになった．第 1 に，留学生 A が指導助言者として体育授業研究へ参画することを通して，Lewis（2015）が提案する授業研究の 4 つの段階（Study→Plan→Do→Reflect）における「学び」が明らかとなった．具体的には，Lewis（2015）の 4 つの段階において，①Study の段階では「学び」が生じにくく，留学生 A が学校や教師とどのような関係性を構築していくのかといった課題があったこと，②Plan の段階では，指導案を修正する作業を通して，教師の悩みや不安に向き合うことで教師との信頼関係を作り，そして，教師の不安軽減だけでなく，研究授業の質向上に貢献することの重要性を学んでいたこと，③Do の段階では，指導助言者として，授業の観察の視点や協議会に向けたメモの仕方といった指導助言者としての授業観察力の重要性を学んでいたこと，④Reflect の段階では，指導助言をする上での責任感や教師たちへの配慮の必要性を学んでいたこと，が明らかとなった．

第 2 に，Lewis（2015）が提案する 4 段階の間の領域における「学び」が明らかとなった．具体的には，①Study と Plan の間の領域では，指導助言者として事前の教師との関わりの大切さを学んでいた．②Plan と Do の間の領域では，事前の授業観察によって子どもの理解を深めることができ，さらに，指導助言者として事前の授業観察は重要であることを学んでいた．そして③Do と Reflect の間の領域では，事前の協議会のマネジメントや協議会への工夫の必要性を学んでいた．④Reflect と Study の間の領域では，体育授業研究後の事後交流会の場は初心の教師教育者が教師たちと意見交換をし，さらに，自身を振り返ることで指導助言者としての「学び」につながっていく大事な場であることを学んでいた．

第 3 に，留学生 A が指導助言者として体育授業研究に参画するプロセスで，ベテラン教師教育者

の働きかけと協同的な教師教育者による活動の影響は大きいことが明らかとなった．具体的には，留学生Aが体育授業研究における指導助言の経験を有するベテラン教師教育者から学んでいたことと，他の教師教育者といった他者との協同的作業の重要性に気づいていた．このことから，初心の教師教育者が，将来，指導助言者として自立していくためには，自身の様々な経験や授業研究に携わる他者からの「学び」が肝要となることが明らかとなった．

6.3. 中国人留学生の体育授業研究の企画・運営による教師教育者としての「学び」の実態

第4章では，2020年の10月から11月にかけて中国・内モンゴルのX教員養成校において体育授業研究を企画・運営した留学生Aを対象とした．体育授業研究の参加者は，体育教師8名，学生33名と留学生Aの計42名であった．表3は，留学生Aが企画・運営した体育授業研究の概要を示している．また，留学生Aが企画・運営した体育授業研究に参加した体育教師8名へのインタビュー（調査1）及び，その後に留学生Aとクリティカルフレンドとの2回のグループインタビュー（調査2）を実施した．得られたテクストデータについて，第2章と同様にSCAT（大谷，2019）を用いて分析した．

表3　留学生Aが企画・運営した体育授業研究の概要

内容	事前の模擬授業	授業の準備	研究授業	授業後の協議会
期日	11月20日	11月20日・24日	11月27日	11月27日
目的	模擬授業の観察と現状把握	指導案の作成と修正	授業の観察	授業の改善の検討
参加者	学生33名，体育教師8名，留学生A	学生33名，体育教師1名，留学生A	学生33名，体育教師8名，留学生A	学生33名，体育教師8名，留学生A
時間	45分	90分	25分	45分

結果として，以下の3点が明らかとなった．第1に，留学生Aは体育授業研究の企画を通して，授業研究の現状に合った目標設定の重要性に気づいたことである．その要因として，3点が考えられた．1点目に，自国の教育の現状をメタ認知できたことである．2点目に，事前準備を通した現状把握ができたことである．3点目に，中国・内モンゴルの教育改善に寄与したいという願いが背景にあったことである．

第2に，留学生Aは体育授業研究の運営を通して，教師教育者の支援者としてのあり方について再認識し，自身の教師教育者としてのアイデンティティが芽生えたことである．その要因として，2点が考えられた．1点目に，体育授業研究を通して自己達成感を得たことが留学生Aのアイデンティ

ティ変容に大きな影響を及ぼしたことである．2 点目に，中国・内モンゴルの教員研修の改善の試みによる自身の教師教育者としてのあり方について自覚し，留学生 A の教師教育者としてのアイデンティティ形成が大きく進む要因となったことである．

第 3 に，留学生 A は体育授業研究の企画・運営を通した自身の今後取り組むべき課題に気づいたことである．その要因として，2 点が考えられた．1 点目に，留学生 A 自身が体育授業研究の企画・運営において悩みと不安を抱え，葛藤したことによる他の教師教育者との協同活動が必要であることに気づいたことである．さらに，留学生 A は，自らがその先駆けとしての役割を担っているということに気づいていた．2 点目に，ベテラン教師教育者の立ち振る舞いが留学生 A 自身の行動を認知・自覚するための鏡となり，自身の技能や知識の不足といった点について自己理解ができたことである．

7. 本論文の成果と今後の課題

本論文では，留学生 A を対象に，セルフスタディを手がかりとして，体育授業研究を通した教師教育者としての「学び」の実態について検討した．そして，研究の目的で提示した 3 つの研究課題の解明に向けて，分析・検討し，以下の 3 点の知見を得た．

研究課題（1）日本の体育授業研究の観察による留学生 A の教師教育者としての「学び」の実態を明らかにする．

研究課題（2）日本の体育授業研究において，指導助言者として参画することによる留学生 A の教師教育者としての「学び」の実態を明らかにする．

研究課題（3）中国の教員養成校における体育授業研究の企画・運営による留学生 A の教師教育者としての「学び」の実態を明らかにする．

（1）留学生 A は教師教育者として，日本の体育授業研究の観察を通し，授業研究のシステムや体育授業作りの仕組みに関する「学び」と日本の授業研究を支える学校文化に関する「学び」の 2 点があることが明らかとなった．

（2）留学生 A は教師教育者として，授業研究のサイクルにおける Study，Plan，Do，Reflect の 4 段階における「学び」と 4 段階の間の領域にある新たな「学び」が見出された．また，留学生 A が授業研究における指導助言の経験を有するベテラン教師教育者から学んでいたことと，他の教師教育者といった他者との協同的作業の重要性に気づいていたことが明らかとなった．

（3）留学生 A が教師教育者として体育授業研究を企画・運営することで，①現状に合った目標設定の重要性，②自身の教師教育者としてのアイデンティティの萌芽，③自身の今後取り組むべき課題への見通し，といた気づきやその要因の 3 点が明らかとなった．

最後に，本論文の限界と今後の課題についても述べておく．

1 点目は，追跡調査の必要性である．留学生 A がどのような教育に関する価値観を持っているの

か，そして，日本の体育授業研究を通して学んだことを，自国での授業改善や授業研究を実践する際にいかに役に立てるのか，追跡調査が必要である．2 点目は，事例の蓄積の必要性である．より一般的な傾向を明らかにするために，留学生 A の日本の体育授業研究を通した教師教育者としての「学び」に関する研究をケーススタディとして蓄積していく必要がある．3 点目は，留学生 A の教師教育者としての「学び」について，教師教育者の視点のみからの考察となった．そのため，今後は，教師教育者の影響を受けた教師を対象に教師教育者の専門性開発を検討するなどして，多角的に教師教育者の「学び」を評価する必要がある．

引用文献

日本語文献

岩田昌太郎（2020）体育の授業研究における教師教育者の役割．木原成一郎・大後戸一樹・久保研二・村井潤・加登本仁（編）子どもの学びがみえてくる体育授業のすゝめ．創文企画：東京，pp.33-40.

川喜田二郎（1995）発想法ー創造性開発のためにー（69 版）．中公新書：東京.

木原成一郎・大後戸一樹・齊藤一彦・岩田昌太郎・久保研二・村井潤・加登本仁・嘉数健悟（2018）校内研修として行われる体育授業研究の役割ー日本における授業研究の役割と中国での授業研究の現状と課題ー．体育科教育学研究，34（1）：61.

木原俊行（2006）教師が磨き合う学校研究．ぎょうせい：東京.

大谷尚（2019）質的研究の考え方ー研究方法論から SCAT による分析までー．名古屋大学出版会：名古屋.

小柳和喜雄（2018）教師教育者のアイデンティティと専門意識の関係考察：Self-study, Professional Capital, Resilient Teacher の視点から．奈良教育大学教職大学院研究紀要「学校教育実践研究」，10：1-10.

レイブ・ウェンガー：佐伯胖訳（1993）状況に埋め込まれた認知ー正統的周辺参加ー．産業図書.〈Lave, J. and Wenger, E. (1991) Situated learning: Legitimate peripheral participation. University Press: Cambridge, UK.〉

ロックラン，J．J．：武田信子監修（2019）J.ロックランに学ぶ教師教育とセルフスタディ．学文社：東京.

ルーネンベルク・デンヘリンク・コルトハーヘン：武田信子・山辺恵理子（監訳）（2017）専門職としての教師教育者：教師を育てるひとの役割，行動と成長．玉川大学出版部〈Lunenberg, M., Dengerink, J. and Korthagen，F. (2014) The professional teacher educator: Roles，behaviour, and professional development of teacher educators. Sense publishers.〉

齊藤一彦（2020）コラム 4：開発途上国におけるレッスン・スタディ．木原成一郎・大後戸一樹・久保研二・村井潤・加登本仁（編）子どもの学びがみえてくる体育授業のすゝめ．創文企画：東京，pp.66-68.

佐藤学（1995）学びの対話的実践へ．佐伯胖・藤田英典・佐藤学（編著）学びへの誘い（シリーズ学びと文化①）．東京大学出版会：東京，pp.49-91.

鈴木聡（2016）体育科を研究する小学校校内研究会における外部講師の存在意義に関する研究–体育・スポーツ政策の媒介としての存在に着目して，日本体育・スポーツ政策研究，25（1）：1-18.

英語文献

Clarke, A. and Erickson, G. (2004) The nature of teaching and learning in Self-Study. Loughran, J.J., Hamilton,

M.L., LaBoskey, V.K., Russell, T. (Eds.) International Handbook of Self-Study of Teaching and Teacher Education Practices. Springer: NY, pp.41-67.

Cochran-Smith, M. (2003) Learning and unlearning: The education of teacher educators. Teaching and Teacher Education, 19(1): 5-28.

Huang, R. and Shimizu, Y. (2016) Improving teaching, developing teachers and teacher educators and linking theory and practice through lesson study in mathematics: an international perspective. ZDM Mathematics Education, 48: 393-409.

Kosnik, C., Menna, L., Dharamshi, P., Miyata, C., Cleovoulou, Y. and Beck, C. (2015) Four spheres of knowledge required: An international study of the professional development of literacy/English teacher educators. Journal of Education for Teaching, 41(1): 52-77.

Koster, B., Brekelmans, M., Korthagen, F. and Wubbels, T. (2005) Quality requirements for teacher educators. Teaching and Teacher Education, 21(2): 157-176.

LaBoskey, V.K. (2004) The methodology of self-study and its theoretical underpinnings. Loughran, J.J., Hamilton, M.L., LaBoskey, V.K. and Russell, T. (Eds.) International Handbook of Self-Study of Teaching and Teacher Education Practices. Springer: NY, pp.817-869.

Lanier, J. and Little, J.W. (1986) Research on teacher education. Wittrock, M. C. (Ed.) Handbook of Research on Teaching (3rd ed): NY, pp.527-560.

Lewis, C. (2015) What Is Improvement Science? Do We Need It in Education? Educational Researcher, 44(1): 54-61.

Lunenberg, M. (2010) Characteristics, scholarship and research of teacher educators. Baker, E. McGaw, B. and Peterson, P. (Eds.) International Encyclopedia of Education (3rd edition) Oxford: UK, pp.676-680.

Russell, T. and Schuck, S. (2005) Self-study, critical friendship, and the complexities of teacher education. Studying Teacher Education, 1(2): 107-121.

Saramas, A. (2010) Self-Study teacher researcher. Thousand Oaks: Sage.

Sato, T., Tsuda, E., Ellison, D. and Hodge, S.R. (2020) Japanese elementary teachers' professional development experiences in physical education lesson studies. Physical Education and Sport Pedagogy, 25(2): 137-153.

Schmidt, R.W. (1990) The role of consciousness in second language learning. Applied Linguistics, 11(2): 129-158.

中国語文献

黄偉（2017）教育の近代化のための教師教育の活性化．中国教師，（20）：16-19.

鄭丹丹（2013）教師教育者とその職業基準に関する国際比較研究．華東師範大学博士論文.